

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌 等又は発表学会等 の名称	概 要
<p>1 (学術論文)</p> <p>公認心理師養成カリキュラムを医師養成カリキュラムから考える—客観的臨床能力試験 Objective Structured Clinical Examination の導入について—</p> <p>Cluster analysis of patients with alcohol use disorder featuring alexithymia, depression, and diverse drinking behavior</p> <p>Development of a 20-item questionnaire for drinking behavior pattern (DBP-20) toward personalized behavioral approaches for alcohol use disorder</p> <p>臨床心理学分野における objective Assessment Clinical Examination (OSCE)の文献的考察—quasi-systematic review—</p> <p>病名の把握・告知の体験・心理教育受講体験が統合失調症患者の知識度に及ぼす影響</p> <p>精神科急性期病棟入院時の心理教育プログラムにおける疾病及び薬物の知識の変化が退院後の外来通院期間に及ぼす影響</p> <p>精神科病院における入院長期化の予測因子に関する研究 - 精神科リハビリテーション行動評価尺度(REHAB)を用いた社会機能における後方視的研究</p> <p>Effects of attitudes towards ambiguity on subclinical depression and anxiety in healthy individuals 《筆頭論文》</p> <p>Attitudes towards Ambiguity in Japanese Healthy Volunteers 《筆頭論文》</p>	<p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p> <p>単著</p> <p>単著</p> <p>単著</p> <p>共著</p> <p>共著</p>	<p>印刷中</p> <p>2024 年 5 月</p> <p>2022 年 6 月</p> <p>2022 年 3 月</p> <p>2020 年 10 月</p> <p>2019 年 12 月</p> <p>2019 年 8 月</p> <p>2019 年 4 月</p> <p>2018 年 12 月</p>	<p>行動科学 62(2). 日本行動科学学会</p> <p><i>Neuropsychopharmacology Reports</i>. Wiley. DOI: org/10.1002/npr.2.1244 9</p> <p><i>Alcohol</i>, 101 pp. 9～16. Elsevier. DOI: org/10.1016/j.alcohol.2022.03.002.</p> <p>広島国際大学心理臨床センター紀要, 20 pp. 1～13.</p> <p>琉球医学会誌, 39(1-4) pp. 65～72. 琉球医学会</p> <p>九州神経精神医学, 65(1) pp. 26～32 九州精神神経学会</p> <p>精神医学, 61(8) pp. 955～963. 医学書院</p> <p><i>Health Psychology Open</i>, 6(1) SAGE Publications DOI: org/10.1177/2055102919840619</p> <p><i>Current Psychology</i>, 37(4) pp. 913～923 Springer Publishing DOI:10.1007/s12144-017-9569-9</p>	<p>本研究では OSCE の臨床心理学系大学院への導入にあたり、臨床技能の評価方法及びコア・コンピテンシーについての検討を課題として論じている。(服部 稔, 榎木 宏之, 田形 修一, 蓮沼 直子)共同研究につき本人担当部分抽出不可能。</p> <p>アルコール使用障害における多角的な飲酒行動のサブグループ抽出のためにクラスター分析を行った結果, 3 群に類型化されることが明らかとなった。(9 頁) (Kurihara, <b>Enoki, H.</b>, K., Shinzato, H., Takaesu, Y., &amp; Kondo, T.) 共同研究につき本人担当部分抽出不可能。</p> <p>アルコール使用障害における飲酒行動パターン同定のための尺度として 4 因子で構成される DBP-20 が開発された。(8 頁) (Kurihara, K., Shinzato, H., Koda, M., <b>Enoki, H.</b>, Otsuru, T., Takaesu, Y., &amp; Kondo, T.) 共同研究につき本人担当部分抽出不可能。</p> <p>臨床心理学分野における OSCE に関する準システマティックレビューを行った結果, 幅広い OSCE の実施が示唆され, 学生にとってはポジティブな経験として受け止められていることが明らかとなった。(13 頁)(服部 稔, 榎木 宏之, 田形 修一)共同研究につき本人担当部分抽出不可能。</p> <p>統合失調症を対象とした心理教育において, 自身の病名を正しく把握していることと, 心理教育を受けたという自覚が, 知識度の予測因子であることを検証した。(8 頁)</p> <p>精神科病院入院中に心理教育を受講した統合失調症患者の継続的外来通院の要因を後方視的に検討した結果, 抗精神病薬への理解と, 薬を服用していても社会復帰はできるとの認識が外来通院の継続を予測することが示唆された。(7 頁)</p> <p>社会機能の中に潜む, 1 年以上の精神科病院入院継続の可能性を予測するリスクファクターを抽出することを目的に, 社会機能尺度 REHAB を用いて後方視的に検討した結果, 「社会生活の技能」のカットオフ値が算出され, 同因子が 1 年以上の入院を予測する因子として認められた。(9 頁)</p> <p>一般成人の曖昧さへの態度の抑うつ・不安 への影響力を検討した結果, Enjoyment という曖昧さを享受する態度には, 抑うつ・低減というメンタルヘルスの向上に繋がる介入・対処行動を含む可能性が示唆された。(7 頁)(担当部分:ほぼ全般にわたり担当。担当頁特定不可能)(<b>Enoki, H.</b>, Koda, M., Nishimura, S., &amp; Kondo, T.)</p> <p>健常者 1019 名を対象に既存尺度「曖昧さへの態度尺度」について因子分析を行った結果, 4 因子が抽出され, 関連尺度との間では有意な相関が認められ新たな因子構造が確認された。(11 頁)(担当部分:ほぼ全般的に担当。担当頁特定不可能)(<b>Enoki, H.</b>, Koda, M., Saito, S., Nishimura, S., &amp; Kondo, T.)</p>